

表現としての表記

——長野まゆみ著『少年アリス』の用字法——

高 松 正 毅

一 イデオロギーとしての表記

表記に一言を持つ人は多い。現実にはそう簡単に割り切ってしまうには問題があるが、大きくは革新派と保守派とに分けることができる。まず革新派の急先鋒として、最近ではさほど活発な運動を展開してはいないものの、ローマ字やかな文字だけで日本語を綴ろうとする運動をあげることができる。仮名もしくは漢字を捨てよ、というのである。この運動の興隆にはある種の要請もあずかっていた。日本が国際化するにあたっては、この国の文字体系の複雑さ煩雑さはなんとしても乗り越えたいものだったのである。第一、文字の数と種類が多すぎて、タイプライターのような機械では非常に扱いにくかった。

ところが、「ワープロ」というツールの出現によって、曲面は百八十度転回したといえようか。「当用漢字表」以降、漢字は確

実に削減され減少する傾向にあったのだから、「ワープロ」の出現によって、使用漢字は、第一水準、第二水準、さらには補助漢字と、かえってその数を増やす趨勢にある。今や現行の「常用漢字表」は、「JISの漢字表」に席巻されてしまった感があるが、この事実も、頭で考えたものよりは、日々用いられるものの方が優勢になることを示しているよう。（もちろん妙な異体字を作ってしまったたり、『新撰字鏡』にしか見えないような字義用法未詳のものが紛れ込んだりしたのは論外であるが、……）こうしてみると、漢字は捨てられるどころか、ますますその必要性・重要性を増しているようにも見える。また、もはや漢字は「書く」時代は終わり「読む」時代に入った、ともいえるようだ。

保守派には、特に漢字の新字体・略字体を嫌い、旧字体・正字体にこだわる人（漢文の専門家に多いようである）がある。また歴史的仮字遣いを捨てようとしないう人々がいる。これは作家など

の文筆家に多く、国語学者では水谷静夫先生がそうである。この対極にあるのが「表音的」仮名遣い支持者で、ある時期の杉本つとむ先生がそうであり、他に国語学者では保科孝一、安田喜代門の両氏がそうであった。「わたしは東京へ勉強をしに行く。」を「わたしわ東京え勉強おしに行く。」と表記する行き方である。

古く仮名遣いの論争は、契沖と橘成員とのものがある。これは「学問的真理」と「伝統的權威（定家仮名遣い）」という、いわばそれぞれの大義名分を背負つての論争であつたため、楯取魚彦に至つて決着がついたのは、ただ単に落ち着くところに落ち着いたといった感がある。次いで本居宣長と上田秋成のものが有名であるが、この二人の論争では、かたや「規範主義」、かたや「放任主義」といった色彩を帯びはじめ、論争はかみあつてこない。ここに到ると、もはやどちらが正しいという問題というよりも、「イデオロギー」の対立であるとも言える。ある種の理想状態（『イデア』を設定し、こうあるべきだ、こうでなければならぬ）と主張するのである。こういった行き方を、ここでは「イデオロギー」としての表記」と呼ぶことにしよう。

今日、たとえば奥田靖夫氏を筆頭とする言語学研究会においては、「漢語は漢字で、和語はかなで」という表記法を貫いている。しかし現実には、漢語と和語とは厳密な区別が難しい（これには『新潮現代国語辞典』を引くとしても）うえに、漢字仮字まじり文では、漢字が読点の役割も果たしているわけで、そのため日本語の表記法では、句読法がほとんど発達しなかつたという歴史的

経緯をも無視しているのではないか。いったい、「さようなら」を「さ様なら」と書くことに何の意味があるというのであるうか。さらに、実際にその文章を読んでもみればわかるとおり、彼らの論文の形式（書式？）とも相俟つて、その読みにくさといったところの上ない。「道理」を通したら「読みやすさ」が引つ込んでしまった結果になつてゐる。

日本語をどう表記するかは論議を尽くさねばならない問題ではある。また、特に論文や公的文書などでは、米国の「マニユアル オブ スタイル」のような清書法の規範も欲しいところだ。しかし、なによりも重要なのは、ユーザーフレンドリーならぬリーダーフレンドリー、つまり「読みやすさ至上主義」でなければならぬと私は信じて疑わない。

読み手のことを全く思いやらないのであれば、その人自身の文章である以上、そういった人々が何をどう書くかが、それは自由勝手である。ただしそれを教育の場に持ち込むなどして、他人に押し付けるとなると問題は別である。

ことばというものは、それをどう表記するかも含めて、教育によつてもたらされるものである。しかし、またことばは、一部の特権的階級によつて担われているのではなく、そういった教育の基盤の上に、一般庶民が日々用いて支えているものなのであるから、そのよつて立つところには、「慣習」というものの存在が大きい。きちんと教育すべきところは教育しなければならぬが、自然と変化していくものは、「乱れ」でもなんでもない。も

とより正す必要などないのである。よって国語審議会の「ラ抜きことば批判」などは、方言の蔑視ということも含めて愚の骨頂であると断じ得よう。

二 表現としての表記

さて、これから紹介しようとする文字の使い方は、右に述べた「イデオロギー」としての表記」とは全く別のあり方を示すものである。ある種の効果をねらって、文字を意図的に選んで用いようとする。言ってみれば、「表現としての表記」だ。

表記ということになると（ここでは明治三十年代以降、ほぼ現行の句読法が定着してからのことを念頭に置く）、変わったところでは、英語やフランス語など西欧の外国語をアルファベットまたは片仮名で書き、その意味（訳）をすぐ脇にルビでそえるもの（山田詠美の作品など）、文字の上にわざと縦線を印刷し、見せかけとするもの（丸谷才一『年の残り』に見える）、そのほか「」やーなどの記号の使い方を工夫したりするなど、さまざまな試みがなされてきた。

しかし、用字法ということに限定すれば、そのなかでも最も注目されるのは、池波正太郎氏（『鬼平犯科帳』など）が用いているものである。『女より、酒（これ）さ』『熱い酒（の）をくれ』『あずけておいた金（ぶん）をもらうぜ』（原文ではルビ付き）のように表記する。池波氏は、漢字の持つ表意性を十二分に引き出したと言える。このように氏の用いた漢字はもはや発音発

声されることを前提とはしていない。（『鬼平犯科帳』の大ファンである私は、この事をいつか紹介しようと思っていたが、先に井上ひさし氏によって（『二ホン語日記』文藝春秋刊）指摘されてしまった。）

一般に、ことばは「音声」と「形式（＝表記）」と「意味」との三つの側面を持つと考えられているが、「漢字」という「形式」は、あまりにも強力で「音声」とは無関係にひとり歩きできる力を持っているのである。

江戸川乱歩の小説に、サーカスで飼われているかどうかする「狸々（しろうじょう）」が、人間を殺すというのがあった。その作品を読んだ当時、私は中学生であつたと記憶するが、「狸々」が何か解らず、ひどく恐ろしい印象を持ってドキドキしながらその小説を読んだことを憶えている。ところが後で「狸々」を調べてみたところ「オランウータン」のことだとわかり、全く興醒めしてしまった。動物が好きで、動物の生態を紹介するテレビ番組を良く見ていた私は、そのことを知ったとたんに、事件の設定があまりに荒唐無稽なものと感じられたからである。「狸々」ならそんなことをするかもしれないと感じられたものが、「オランウータン」ではとうてい考えられない事だと思われた。著者乱歩自信も「オランウータン」など実際には見たことがなく、ただたんに知能が高い猿という程度の知識だけで、この小説をつくったのであろうと思った。

もちろん「狸々」と「オランウータン」とでは、辞書的な意味

は全く同じである。しかし、それを読んだ私にとっては全くの別物であったのだ。

たとえて言うなら、「虞美人草」と「ひなげし」と「ポピー」とでは、それらの語の指示物は同一（辞書的な意味は同じ）であつても、文章の中に置かれた時には別物になりかねない、否、いやおうなしになつてしまふということだ。これをさらに敷衍すれば「馬鹿」と「ばか」と「バカ」も文章のなかでは別物だということになる。それならば、そういった文字の持つ力を、逆手にとって利用しようというのが、「表現としての表記」である。

ではこれら文字の持つ力とは一体何なのであるか。その力が、辞書に書かれるような「語の意味」ではない以上、それは文章の中に置かれてはじめて発揮しうる効果（またはニュアンス）といったようなものでしかなく、明確には定義しがたいものである。しかしまた、実感としては厳然として存在するものだ。

もちろん問題は残る。そこに書き手の意図が存在しないのであれば、それは「表現」とは言いがたいはずだからである。たとえ結果的に読み手の受ける印象が全くの別物になつたとしても、それは単なる偶然の出来事にすぎはしないか。書き手のくせや好み、また書き手・読み手双方の知的背景、さらには作品の生まれた時代等々によつて大きく左右されるようなものを、はたして「表現」と呼んでいいのかどうか……。私は、それも「表現」であると考えたい。書かれたものはひとり歩きする、それも書き手の意図を無視して。そしてその文章の意味も意義も、受け手によつて

千差万別、また時代の流れにしたがつて移ろいゆくものだからである。

ここに紹介する長野まゆみ氏の用いることば、そして表記は、我々の耳目には新しく、それがかえつてレトロスペクティブな感覚を呼び起こす効果を確かにあげている。ことばの持つ風あい、文字列の持つ雰囲気をついに活用しているといえよう。

長野氏にはまた『ことばのブリキ罐』という本があり、そこに氏の用字の源を見ることができる。その本の7ページに「少年の食べるもの」と題し、以下のような文章がある。

子供の頃から、辞書や読んだ本の中の氣に入つたことばを抜き書きするのを好んでいた。それがいつしか自家製の辞書となり、近頃は創作に欠かせない資料となつてゐる。辞書と云つても体裁はスケッチブックに近く、文字のほかに絵や切り抜きなども加えてある。

非常に残念なのはそれぞれのことばの出典があげられていないことだ。

著者長野まゆみ氏は昭和34年生まれであるから、この作品に用いられている、以下に紹介するような文字の教育は受けていないはずである。氏の文章文体は、少々理屈っぽいところが氣にはなるものの、宮沢賢治を彷彿とさせる美しいメルヘンである。

この作品の登場人物は、主人公の「アリス」、そして友人の「蜜蜂」、その飼犬である「耳丸」、そのほか「耳丸の兄」、「教師」そして「生徒たち」。

物語は、睡蓮の開く音がする月夜。兄に借りた三十六色の色鉛筆を教室に忘れてしまった蜜蜂に誘われ、犬の耳丸とともに夜の学校に忍び込むアリス。誰もいないはずの理科室で行なわれる不思議な授業を覗き見てしまったために、アリスは教師に捕えられてしまう……。昼の世界に棲み、静かな黒い瞳を持つアリスは、偶然創ってしまった石膏の卵のために、夜の世界へと紛れ込み、ついには黒鷲へと変身させられてしまうのだった。

一時代前の学校のモルタル木造の校舎や教室内で流れていくストリーは、ほのぼのとしたノスタルジーを誘い、全編がかぐわしい花のかをりと鮮やかな色彩にみちみちている。

この作品『少年アリス』は、第二回文藝賞を受賞した。

三 『少年アリス』におけることばの選び方とその表記

『少年アリス』におけることばの選び方とその表記には、いくつかの特徴を指摘することができる。まずそれらを抽出し、以下に分類列挙した上で、用字例を索引の形式で示すこととしよう。

まず、語の選び方では、外来語、つまりカタカナ語の使用を避け、古風な語を用いているのが目につく。「敷布」七―七、十一―一、「寝台」百―五、百―十九―三、「露台」八―二・三・七、四十九―三、五十一―三・十一、五十二―四、六十八―十、七十五―三、九十六―五・六、九十八―四、など、今日であれば、それぞれ「シート」「ベッド」「バルコニー」と言うところであろう。

今回、漢字含有量の計量はしなかったが、一目見て漢字が多め

なのに気づく。これは漢字で書かなくても良いところを、わざわざ漢字で表記するからなのだが、むやみやたらと漢字で書いていくわけでもない。また、特に旧字旧仮名遣いの徹底をめざしているわけでもないようである。旧漢字の例としては、「(耳丸の) 聲」七―十・十一、七十九―四、「一聲吠えて」九十三―三、「ひと聲吠えて」百五十六―十一、「(人の) 声」は新字体があり、また気づきにくいのが、「迄」五十一―九、五十四―六、六十二―十、九十七―十、「遮」十四―三、百三十三―一、「遙か」百二十三―八、百六十一―十一、「辻褄」五十一―九、の「しんにょう」は、点が二つの旧字体になっている。

旧仮名遣いの例としては「ほのを」百―一七、「かをり」九十五―六、百四―六、「ぢゃ(ないか)」十六―九、二十二―八、三十一―五、四十一―一、九十七―七、百三十九―七、百四十六―八・九・十一、百五十七―九、などが目につく。

また、繰り返し符号は「ヽ」「ヾ」「ㄣ」を用いている。

漢字表記が徹底されているわけではないが、指示詞の多くが漢字を交えて表記される。

ここ「此処」六十一―四、七十一―七・九、八十一―十、八十四―六、八十五―三、九十一―八、百六―四、百十一―十、百四十三―十

そこ「其処」二十八―一、三十二―十、三十七―六、四十三―九、四十五―六、八十一―五、八十六―四、百十四―十、百三十九―四

あそこ「彼処」二十二―6、二十四―5・7

かしこ「彼処」八十五―3

どこ「何処」二十一―10、三十一―7、三十一―8、三十三―

7、四十一―6、四十二―2、四十九―8、五十一―3、

五十二―4、六十三―8、七十一―5・8、七十三―7、

八十一―11、八十三―1、八十五―3、百六―6、百九―

7、百二十二―1・3、百二十七―1、百三十一―5、

百三十七―7、百四十四―2、百四十六―9、

(ルビがないので判然としないが、次の二例は「いづ

こ」とも読む可能性がある。)

「何処ともつかぬ遠くを見つめ」九十八―5

「何処ともつかないような遠くに目を向け」百四十八―8

この「此の」三十四―10、五十一―10・11

その「其の」二十五―5、三十二―11、三十五―1、四十五

―5、五十一―1、五十四―4、五十七―3、六十三―11、

六十八―9、百七―9、百八―6、百二十五―3、百三

十七―9、百四十―1、百五十一―11、百五十二―4、

百五十三―3、百五十五―2・10、百五十九―6・8

(この他、各章題は「其の一」のように示される。)

これ「此れ」二十九―4、三十四―5、三十六―5、五十八

―3、九十四―3、「其れぐ」四十三―8

それ「其れ」二十五―6・6、二十七―3、五十二―4、六

十六―8、百十六―2、百二十三―1、百三十五―9、

百五十六―5、百五十九―10、百六十―3

こちら「此方」三十二―10、六十二―4

また、副詞および副詞相当語句の多くを漢字で表記する。主なものをあげてみよう。

いちはやく「逸早く」八十七―1

うまく「上手く」五十五―11

かえって「却って」十一―7

かすかに「微かに」百二―4、百三十二―11、百三十八―4、

百五十―2、(「微かな」四十九―5、百三十六―1)

かなり「可成」二十八―8

けむたく「烟たく」四十六―5

じきに「直に」九十五―7、百三十六―11、百四十二―11、

百四十三―11

しきりに「頻りに」三十一―1、七十九―11、八十一―11

しばらく「暫く」三十六―8、五十五―3、七十一―3、百

二十二―2、百四十七―5

すぐさま「直ぐ様」百三―2

すでに「既に」五十一―9、六十―6、七十三―9、八十九

―4、百十一―10、百十七―3、百六十一―11

たやすく「容易く」百五十九―10

てんでに「手々に」六十五―6、百十一―10

なるほど「成程」九―4、五十七―3、百十四―11

ひそかに「密かに」百五十九―4

ほとんど「殆ど」二十八―8、四十八―7、五十七―6
ほどなく「程無く」百二―5

ようやく「漸く」五十九―2、六十四―10、八十―2

わずかに「僅かに」三十四―1、百三十六―6、(「僅かな」

百二十五―1)

複合動詞などの複合形式は、やはり必ずといっていいほど漢字を交えて表記する。「生まれ損い」七十二―5・9、のようなものである。これは枚挙にいとまがないので、目についたものを以下に示す用字例中に混配した。

また、ごく一般的漢字の使用を避け、あえて別の漢字を用いようとする、といった傾向なども指摘できるが、それらは以下に示す用字例中に、やはり目についたもののみを混配した。

「アリス」の名のほか、「ボケット」「ノート」といった外来語をカタカナ表記するのは当然のこととして、長野氏は擬音語の多くをカタカナで表記する。しかしこれは徹底されているわけではない。

氏独自の用字法としては、促音の「っ」をカタカナで書くというのがある。これも「きゅッ」百二十一―8、「しッ」三十二―1、「じッと」五十七―5、「そッと」九十四―10、「つッと」五十一―6、「はッと」五十一―2、七十九―2、百三十九―4、「ぼうッ」と二十二―5、「ぼうッ」と三十四―1、「ほッと」三十七―7、六十五―10、など擬音語に多く、次いで「危いッ」五十一―5、「嘘だッ」七十六―8、「誰だッ」八十六―4、「違うッ」七十五

―3、「はいッ」四十―7、「ア、リ、スーッ」七十九―5、「蜜蜂ッ」七十九―7・9、「耳丸ッ」三十三―2・4、八十一、八十六―5、百四十三―7、など、呼び掛けや応答のことに用いられている。その他、促音ではないが「三ッ揃え」二十九―5、「ワラ半紙」百四十三―5、「寝ボケ」百五十七―9、のような例も見える。

さらに、表記だけの問題からははずれるのだが、表現効果としての語の選び方についても触れておくことにしよう。以下に列举する。

まず気づくのは「植物名」の多さで、これらが作品のなかで大きな役割を果たしている。またそのほとんどを漢字で表記する。

あけび「木通」百二十七―3、百二十八―2・4、(「三葉あ

けび(の実)」百二十七―8)

い いぎり「椅」五十四―2

いたどり「疼取」六十五―8、六十六―7、六十八―6

いばら「茨(の実)」二十五―3・9、(「イバラ」百二十四

―9、百三十九―11、「サルトリイバラ」二十五―1・

2、百三十九―10・11)

かしわ「榎(材の机)」百十一―1

がま「蒲(の花粉)」四十六―1

からすうり「烏瓜」十六―題、十八―5、十九―11・11、三

十三―5、六十五―7、八十一―9、八十五―11

からすのえんどう「烏野エンドウ」八十九―9

からたち「枳殻」百四—1、百五十六—9
 きんもくせい「金木犀」四十九—5
 ぎんもくせい「銀木犀」九十二—4、九十五—6、百四—7
 くぬぎ「櫟」五十四—1
 くら、「眩草」八十九—8・9、九十—3
 けやき「櫟」百五十六—10
 ささ「笹（の新芽の鞘）」四十六—11
 しだれやなぎ「枝垂れ柳」九十二—1
 しばくさ「芝草」九十一—7
 じんちようげ「沈丁花」九十一—6
 すいふよう「醉芙蓉」百五十三—1
 すいれん「睡蓮」七—6、百二十五—11
 (「スグリ」百三十七—4、百五十二—3)
 たけ「竹（皮）」四十五—9
 たちあをい「たち葵（の盃）」百三—4
 たんぽぽ「蒲公英」九十二—8
 ねむ「夜合樹」二十一—6
 のうぜんかつら「凌霄花」八—3、七十五—3
 はこやなぎ「箱柳」六十五—8
 はっか「薄荷（の花）」九十八—6
 ばら「薔薇」九十五—6、「夏薔薇」（なつばら）九十二—4
 (「ハリエンジュ（の花）」百三—5)
 ひいらぎもくせい「柂木犀」四十七—1、百四—1、百九—

11、百五十六—9
 ひるがお「昼顔」八十九—1・5
 ふじ「藤（棚）」百四—4・7
 ぶどう「葡萄（水）」百四—6
 ふよう「芙蓉」百四—9
 (「ヘリオトロオプ（の房）」百四—5)
 むく「椋」百五十六—10
 もくせい「木犀」百五—3
 やなぎ「柳（の枝）」九十二—3
 ようりゆう「楊柳（の窓掛）」七—10
 よもぎ「蓬（の葉）」四十六—1・3
 れもん「檸檬」百二十一—9、「檸檬水」二十二—2
 次の鉱物・金属、その他、素材名なども多い。
 いしわた「石綿」百—6
 おおやいし「大谷石」九十二—9、百四—8、百二十二—6、
 百二十四—7
 かいがら「貝殻」四十—4・8、四十一—1、四十三—9、
 四十五—1、「貝殻屑」六十五—2
 かこうがん「花崗岩」百三十六—4、百四十一—5
 ぎゅうこつはい「牛骨灰（の陶器）」百四十八—2
 しつくい「漆喰（の壁）」二十二—3
 しょうにゆうせき「鍾乳石」七—8、百二十三—11、百二十
 五—2

しんちゅう「真鍮」八十―7、百十一―7、百四十六―1

せいどう「青銅」九十三―8

せきえい「石英」百三十三―7

せつかいがん「石灰岩」百二十六―10

せつこう「石膏」七―7、十一―1、三十五―5、三十七―

11、七十三―11、百十六―10、百十七―11、百四十九―

11、百五十一―7、百五十一―5、百五十二―7、百五十

三―1、百五十四―9、百六十―4、「雪花石膏」九十

五―5

たんぱくせき「蛋白石」六十八―8

みかげいし「御影石」百三十三―7、百三十四―10

布地・織物・文様等に関するものも、今日ではなじみの薄いものばかりである。

のばかりである。

あさおり「麻織り（のズボン）」十一―1

いちまつもよう「市松模様」三十二―4、百三十四―10

おりもよう「織り模様」七―7

こうしじま「格子縞」十七―4

さつか―じ「サツカー地」四十八―7

しまもよう「縞模様」十七―4

しゅす「縹子」百二十六―2

つるくさもん「蔓草紋」九十三―10

ひらおり「平織り」九十六―6

めんネル「綿ネル」百―8・9、百二―8、百五十一―9・11

この物語りでは「水」もひとつのキーワードになる。そこで「水」に関する名詞もいくつかあげておこう。

かんけつせん「間歇泉」百二十四―6

すいばん「水盤」八―4、十九―5、二十三―3、二十五―

2・5、百二十三―3・10、百二十四―5・10、百二十

五―1・10、百三十六―9、百四十一―11、百四十九―

3、百五十五―6

すいもん「狐橋の」水門」七十六―3

ばくふ「瀑布」百二十三―8

ふんすい「噴水」十九―9、二十三―3、二十四―5、二十

五―1・1・5、百二十一―6・7、百二十二―6・11、

百二十三―7、百二十四―2・2・11、百二十五―2・

3、百三十六―4、百三十九―10、百四十一―10、百四

十二―4、百四十五―7・8、百四十九―2・6、百五

十五―5・6、「噴水池」十九―3・6、九十三―10、

九十八―8、百四―8、百十四―2、百三十九―9

ほんたん「奔湍」百二十四―4

ゆうすい「涌水」十九―4、四十六―1、五十四―3・6、

五十六―5、九十三―6・11、九十五―1、九十八―9

次に、最も注目されるのが色彩の豊かさである。

あか「紅」五十四―2、「紅い」百四十一―1

「赤」六十六―3、「赤く」二十五―4

あおざめ「青ざめ（た額）」百十八―10

あおじろい「青白い」六十六―6、百五十一―1

「青白く」九十八―5、百四十八―8

あわじろい「淡白い」六十五―9

おうりよくしよく「黄緑色」二十五―3

きいろ「黄色」百三―6

ぎんいろ「銀色」二十五―6、百四十―2、百五十三―3

ぎんおうしよく「銀黄色」百四十―9

くろ「くろ」六十六―3、「黒い」九十八―2、百三十八―

1、百四十一―6、百五十二―3、「黒く」四十一―3

「真黒」(まつくろ) 五十九―3

「漆黒」(しつこく) 百四十二―5

くさいろ「草色」百二十八―2

ぐんじよう「群青」四十八―題、「群青色」六十一―7

こん「紺」二十九―3、「濃紺」(のうこん) 百三十一―7

さんごいろ「珊瑚色」百四十九―1

しろ「白(シャツ)」四十八―8、「白い」十七―4、二十一

―6、二十九―3、九十四―1・4、九十六―6、九

十八―4・9、百四十八―3・7、百五十一―2、「白

く」五十六―5、「白む」(しらむ) 百三―6

すいりよくしよく「翠緑色」九十六―3

ぞうげいろ「象牙色」三十一―1

そうはく「蒼白(な顔)」百二十八―7

だいたい「橙」二十一―1

ときいろ「朱鷺色」八十九―1、百六十―11

にゆうはくしよく「乳白色」二十二―3、百四十九―3

はいいろ「灰色」二十九―3

はいねずみいろ「灰鼠色」百十八―7

みついろ「蜜色」百二十四―3

みどり「緑」百三―3、「緑色」四十五―9

むらさき「小豆紫(あずきむらさき)」百二十七―8

「薄紫」(うすむらさき) 百二十七―8

もえぎいろ「萌黄色」三十九―7

わたいろ「綿色」百二十七―9

色彩名ではないが色を含むものもあげてみる。

ぎんのみ「銀の実」二十五―10、二十六―1・5、百二十一

―題、百二十五―10、百二十六―2、百三十九―4・

7・8、百四十一―3、百四十一―1・1、百五十四―

7・9、百五十五―3・6

ぎんぷん「銀粉」百二十四―2

くろつぐみ「黒鶉」百二十一―10、百三十一―題、百三十七―

3、百三十八―7、百四十一―10、百四十一―1・4・

4、百四十九―5、百五十二―2・3・8、百五十四

―7・8、百六十一―9、「鶉」百三十八―9、百四十

―11、百四十一―3、「鶉」百三十八―10

こくばん「黒板」二十九―1・3、六十三―3・7、七十八

―11、百四十八―2

はくじ「白磁」二十一—7

はくせん「白線」百五—4

はくちよう「白鳥」九十二—5・6、九十三—11、九十四—

11、百四十一—10・11、百四十二—1・3

その他の表現上のアイテム—昔の教室にあつたもの、昔懐かしいものなど。これらもきりがないので、郷愁を誘うのに役立つていと思われ、主なものだけをあげておく。

「足踏みオルガン」百四十三—5、「(三十六色の)色鉛筆」九—2、十四—2、百五十八—5・6、「インク瓶」百十一—2、

「回転木馬」百二十一—8、「教卓椅子」百四十三—6、「巾着」四十五—8、四十六—5、四十七—2・2、六十九—8、「鯨

山」六十一—9、六十五—9、六十六—7、六十七—2、六十八

—6、百五十一—8、「星座早見盤」百—5、「煎じ薬」七十三

—10、「提灯」十八—7、二十一—2、三十三—5、六十五—7、

八十五—11、八十六—2・8、百七—3、百十四—4・6、百三

十三—2、「天球儀」百六—1、百四十三—4、「プロンズ粘土」

三十九—7、「螢星」十八—7、十九—6・11、八十八—7、九

十二—8、九十五—4、百七—2、百十四—4・6、百二十一—

6・7・11、百二十二—2・11、百二十三—3・7、百二十五—

7、「宙に浮く微小な光る石の群で、夏至とともに現われ、秋には消えてしまう夜光性の浮遊物」十九—6、「リノリュウム(の

床)」百十一—11

これらの語、一語が持つ力はごく弱く、それだけでは単なる感

じといったものにしかすぎないが、それらが束ねあわされたとき、渾然一体となつて独特の雰囲気を出してくるのである。

さらには長野氏の文章は、比喩の用法もたいへんおもしろいし、この物語の流れの中では「鳥」「翼」「卵」「天」「空」「星」などの語もさらに重要な役割を果たしているのだが、今回は表記と関係の薄いものへの言及は避けることとしたい。

—『少年アリス』の用字例—

ここには一般的な表記とは思われないもの、あえて漢字で表記していると思われるものをあげた。なんでもない表記でも、他の選択も可能なもの、ゆれのあるものは、ある程度加えてある。これは、「聞き」ではなく「訊き」、「釣り」ではなく「吊り」と表記することを「表現」ととえるからである。

底本として、文庫版『少年アリス』(河出書房新社刊)の初版を用いた。漢数字が頁を、算用数字が行数を示す。底本は、一頁十一行、一行三十二字詰め。適宜()の中に参照、また参考となるものを添えた。活用語の場合、形容詞は終止形を、動詞は終止形ではなく連用形をもつて代表させた。

長野氏の表記は必ずしも一定しておらず、ルビもついていたたりいなくなったりするが、それが原稿通りか、また校正者の手によるの

かは不明である。

あ

あい「遭い」三十四—9、六十一—1

「逢い」六十九—10、七十一—9、百三十七—5

あかり「燈」七—6、三十二—4、三十五—9、百十一—8、百

三十二—8、「灯」十六—題、二十八—2、八十—9、八十

八—7、「明かり」二十八—1、六十八—7、(↓つきあか

り・ひ)

あきれ「呆れ」四十一—2、百十九—4、百五十七—7

「呆氣にとられ」百四十六—5、百五十七—11)

あご「顎」百三十七—10

ある「或る」五十四—3

あわせ「合わせ」百十五—4、「併わせ持ち」二十一—1

い

いい「云い」九—4・5・7、十一—8、十三—8、十四—2・

3・4・5・8、十七—3、十八—10、十九—11、二十二—

7、二十八—3、五十五—3、五十九—8、六十—2、六十

三—10、六十四—1、九十七—2、百八—6・7、百十六—

4・10、百十七—7、百十九—9、百二十八—8・10、百三

十一—7、百四十七—5、百四十八—2、百五十一—7、百五

十二—10、百五十五—11、百五十六—3・5、百五十七—

4・10、百五十八—6、百六十—7・7、「云い聞かせ」五

十七—8、百四十三—1、「云い出し」五十五—9、「云いわ

け」百七—4、「云う通り」九十七—10、百四十七—2、「云

わんとしていること」百三十一—8、「いざと云う時」百七—

7、「否を云わせない」九—8、「有無を云わせぬ」百二十

八—9、「だからと云つて」五十三—10、「どう云う事」二十

七—9、「いと云う」五十四—5、八十九—9、九十六—

2、百七—3、百四十一—6、「いとは云え」五十三—8、五

十四—7

「言い」二十六—5・8、三十一—1、三十三—10、三十

五—2、四十二—7・10、四十三—5、五十一—8、六十二—

10、七十一—11、七十八—8、八十二—4、百十四—10、百二

十一—8、百四十一—1「言う事を聞いて」八十八—11、「有無

を言わせぬ」八十九—3、「そう言う事」二十七—5「いと

言われている」二十五—11、「いと云う」二十七—1・3、

四十四—10、七十五—10、百十二—3

「いうことを聞かない」百十八—7、「こういう」四十二—

10、百七—4、「そういう」九—4、十一—7、九十九—4・

5、百四十一—5、「どういう」四十二—7、七十一—1・2、

七十二—9、「いという」四十八—8、五十一—11、五十一—

10・11、五十三—6、五十五—9・11、五十六—2・6、六

十四—4、八十七—7、九十七—5、九十九—5、百十九—

11、百二十五—4、百二十九—5・6、百三十一—10・11、百

五十六—5、「〜といった」四十—8、七十一—4、「とはい
え」九十九—1

いかない「(〜は)行かない」五十五—4、六十一—4、百十八—

4、百二十五—6

いたずらっぽく「悪戯っぽく」百六十—5

いぶかしげ「訝し氣」二十三—11

いらだち「苛立ち」百十七—5

いろあせ「色褪せ」六十一—7、七十三—10

う

うかがい「窺い」二十八—1、三十四—4、八十三—2、九十一—

—6、百五—7、(↓のぞき)

うつむき「俯き」百十三—8、百四十七—2

うつろ「虚」百二十五—11

うなずき「頷き」二十七—11、三十六—8、四十二—10、五十五—

—3、五十九—9、七十二—1、七十三—1、百三十八—4、

百四十八—11、百五十八—3

うねり「畝り」百四—4

え

えがき「画がき」四十三—8、「描き」六十四—11

お

おおい「蔽い」九十一—7、百一—9、百二十四—2、百二十六—

—2、「蔽い隠し」百四十二—3

おがくず「大鋸屑」百一—8

おかしい「可笑しい」十四—11、「可笑しさ」九—6

おじけづき「怖じ氣付き」五十三—9、五十五—5、百七—2

おびえ「怯え」三十四—6、百十二—10

おもい「想い(を巡らせ)」百六十—10

か

かえり「(卵が)孵り」七十三—3、「(孵化)七十二—10、七十—

三—2)

かかり「(氣に)懸かり」四十八—9、「(心懸け)六十三—8、

「(氣に)掛け」百七—6、「(鍵が)掛かり」八十—7、

11・八十一—4、八十五—2、百五十六—2、「(鍵を)掛

け」七十八—6、八十五—3、百十一—3・5、「(声を)掛

け」八—7、五十六—1、六十一—1、九十六—11、百四十

八—9・11、「(手に)掛け」百十八—7、「腰掛け」百一—

6、百三十六—4、百四十七—6、「(鼻眼鏡を)掛け直し」

百十五—4)

かき「掻き」六十—9、「掻き傷」百四—2、「(不安を)掻きた

て」百二十二—3、百二十七—7、「引掻き」八十一—2、

八十五—4、「水掻き」十九—5、百二十四—10

かぎ「嗅ぎ廻り」九十三―2、「嗅ぎつけ」九十四―1

かけ「駆け」三十三―1、八十四―1、百三十六―4、「駆け降り」六十七―2、「駆け出し」三十三―3・8、百五十六―11、百五十八―4、「駆け付け」五十二―4、「駆け寄り」六十六―9、八十六―6、「追い駆け」七十七―3

かたい「堅い」百三十五―4、百四十九―8

かちあわせ「携ち合わせ」九十七―3

かなわない「適わない」五十三―8

かみ「噛み」八―5、「咬み」八十九―9

がらす「玻璃」九十六―4、百三十三―9・11、百三十四―7、「玻璃洋盆」九十六―8、九十八―6、「玻璃細工」二十一―

1、百十七―3、「硝子」三十一―1、百六―1・2、百二十七―4、百三十四―2、「硝子越し」七十八―11、八十四―

5・9、「硝子戸」七十八―題、八十一―11、八十二―9、

八十四―3、八十五―10、八十六―7、八十七―10、八十八

―9、八十九―1、百二十八―9、「硝子戸棚」六十九―8、

七十一―8、七十三―9、「硝子扉」七―10、四十九―3、八

十五―2、「硝子箱」七十三―11、「硝子片」八十二―6、八

十三―10、「硝子窓」二十二―3、九十九―10、百五―5、

百三十四―8、「くもり硝子」百四十六―4、「窓硝子」百五

―10、百三十六―7、「面取り硝子」二十一―6、

かわいがり「可愛がり」百二十九―2

かわき「渴き」五十七―6・9

き

きき「訊き」十九―9、四十―11、四十二―3、四十四―1、四

十九―9、五十四―11、五十六―8、七十一―6、七十一―4、

百十六―9、百五十二―7、「訊き返し」百五十一―5（↓た

ずね）

きしみ「軋み」六十六―3

きびす「踵（を返し）」百三十―3

きゃしゃ「華奢」十八―3

きり「限（がない）」六十三―11

きりもみ「雑揉み」六十五―6

く

くちばし「嘴」十九―4、九十五―2、百二十五―1、百三十六

―9、百四十一―10・11・11、百五十四―7

くりぬき「削り貫き」十八―5

くれ「（助けて）呉れ」五十五―8

くわえ「銜え」百四十一―2、百五十五―7

け

けしかけ「嚇け」十五―6、九十八―2

げげんそう「怪訝そう」百五十七―7

こ

こうもりがさ「蝙蝠傘」六十二―6、六十五―5

コップ「洋盃」八十九―5、九十六―9、九十七―2・3

「玻璃洋盃」九十六―8、九十八―6

こぼれ「零れ」二十二―3、「零れ落ち」八―4、十九―5、二

十三―3、六十五―2

ごまかし「誤魔化し」八十六―11

こらえ「堪え」九―6

こわし「毀し」百五十五―9、「壊し」八十二―2、八十三―

3・4・8、八十四―2、八十五―6、百五―10、「叩き壊

し」八十二―5、百三十三―11

こわれ「毀れ」九十三―9、百四十五―題

「壊れ」百三十四―2・5、百四十三―6

さ

さかずき「盃」百三―4

さかのぼり「溯り」九十五―1、百二十四―5

ささやき「囁き」七十二―3、「囁き声」二十七―1

さすらい「彷徨い」七十五―7

さつき「皐月」百四―5

さまし「(目を)醒まし」百四十七―11

「目醒め」(めざめ)三十六―1、百四十七―6

し

しげみ「繁み」百四―7

しずく「雫」七十九―1、百三十六―9・10

しびれ「痺れ」九十一―2

しゃべり「喋り」五十七―8、六十九―6、七十六―2

「お喋り」百十一―10

じゅうたん「絨毯」九十一―7

しれ「察れ」五十四―5

す

すくい「水を抄い」九十八―8、百二十六―2、百四十九―6

すす「(煙突の)煤」四十一―3

すみ「棲み」六十―3

せ

せきたてられ「急立てられ」百三十八―11

せりふ「台詞」九十六―7・7

そ

ソーダすい「曹達水」二十―1、九十五―4・7・8、九十六―

1・2、九十七―4

そっけない「素っ気無い」三十七―2

そなえ「具え」六十四―9

そびえたち「聳え立ち」百三—9
そらし「(目を)逸し」七十一—5

た

たずね「訊ね」九—6、十二—11、三十四—4、四十五—11、

「尋ね」二十六—2、三十四—7・8、三十六—6、(↓き
き)

たたき「叩き」七十九—10、八十一—11、百五十七—3、「叩き

壊し」八十二—5、百三十三—11

たたずみ「佇み」百十九—4

ただの「唯の」七十二—7、「たゞの」七十—8

たち「性質」九十七—11、九十九—4

たどりつき「辿りつき」十七—6、「辿り着き」五十六—5、五

十八—6

だまされ「騙され」四十二—11

たれさがり「弛れ下がり」六十一—7

ち

ちりばめられ「鏤られ」百二十四—8

つ

つかまえ「捕え」十九—8・11、三十四—11、(↓とらえ)

つかまり「掴まり」二十五—3・9、五十八—6、八十三—3、

百三十九—10

つかみ「掴み」三十一—10、五十九—2・6、七十四—3、百十
八—2

つきあかり「月灯り」百二十四—3、百三十一—10、百三十二—11

「月明かり」八—4、十八—9、二十一—11、百二十

一—9、百二十二—7、百二十五—2、百三十六—3、百四

十一—9、「月の光」十七—3、十九—1、百四十一—9、

「月光」七—6、四十八—6、百二十六—3、百三十二—11、

百三十三—6)(↓あかり)

つくり「創り」三十六—6、百十六—10、百五十一—7、百五十一

—5、百六十一—4、「創り上げ」七—7、「創り物」百十六—

11、「石造り」八—3、十九—5、「造り物」九十三—1

つき「(電灯が)点き」二十二—8、百三十三—5、(↓ともり)

つけ「(火を)点け」百—6、(↓ともし)

つながり「繋がり」百十一—7、百四十五—11、百六十一—3

「(血の)繋り」八十七—2

つなぎ「繋ぎ」二十一—9、「繋ぎ止め」七十一—6

つぶし「潰し」百二十二—8

つぶやき「呟き」十一—1、三十一—4、七十二—4、百—3、百

三十一—6、百四十三—1、百五十八—10

つまさき「跌」五十九—6

つり「吊り下げ」十八—6

つるし「吊るし」七—10、十二—7、二十一—2、二十二—4、三

十三―5、四十五―8、四十七―1、六十六―6、六十九―
2・8、八十―9、八十五―10、九十八―4、百十四―4
つる「蔓」八―3、十八―6、二十五―2・9、百四―4、百一
十七―3、百二十八―2、百三十九―10

て

てすり「手摺」五十一―3・11、五十二―4、五十三―7、九十
六―6

てのひら(たなごころ?)「掌」百二十六―2、百三十五―11、
百三十七―2、百五十二―2、百五十三―2、百五十四―7

と

とおのき「(意識が)遠退き」七十六―11、九十―3

とげ「棘」二十五―9・10、百三十九―11、百四十―2

ところ「処」十九―2・2、五十四―3、五十六―7、五十七―

1、七十四―11、八十四―3、百二十八―8、百三十五―3、
百三十六―2・4、百三十九―9、百五十九―7

とつて「把手」二十一―7、八十―7・9、百十一―7、百四十六

―1・2、百五十六―2

ともし「(豆電球を)点し」百二十三―6、(↓つけ)

ともり「燈が」点り」百十一―8、百三十二―8、(↓つき)

とらえ「捕え」五十八―5、六十五―10、七十五―9、八十四―

10、(↓つかまえ)

な

なぎ「風ぎ」百四十三―11

なぜ「何故」十三―11、三十四―6・9、三十七―8、五十一―

8、五十二―9、七十一―9、七十一―4、七十四―6、八十

八―1、百二十七―10、百五十八―9

なだめ「宥め」百―3

なで「撫で」八十五―10、百二十六―8

なめ「舐め」百二十五―9

なりゆき「成り行き」百十六―3

に

にじみ「滲み」三十九―9、四十五―5、五十八―5

ぬ

ぬぐい「拭い」六十四―8、百五十一―1

ぬらし「濡し」十九―5、「濡れ」(ぬれ)百五十一―5

の

のうしんとう「脳震蕩」百三十六―11

のせ「載せ」十八―3、百十八―2、百三十七―2

「載り」(のり)百五十一―3

のぞき「覗き」八十四―9、百三―4、「覗き込み」八十五―10、

九十七―2、(↓うかがい)

のど「咽」九十五―7、「喉」百十四―10、百二十五―1

のみ「呑み」九十七―7、「(息を) 呑み」二十六―7、五十―2、

百五十三―4、「呑み込み」九十七―6、「呑みこみ」百四十

一―2、「呑み込め」三十一―5、四十九―9、百三十一―9、

「飲み」八十九―2・10、九十―2、百三十六―11、「飲み

乾し」九十七―4

のんき「暢氣」三十一―11、五十八―10

は

はい「這い」十二―6

はかどり「捗り」四十四―11

はさみ「鋏」四十―3、四十三―5、四十四―3

はばかり「憚り」七十二―3

はまり「嵌まり」十一―7、十五―6、百六―1、百二十七―4、

百三十四―2、「嵌め込み」(はめこみ) 二十一―7

ハンカチ「手巾」百四十九―7

ひ

ひ「陽」百四十九―1、「朝陽」百六十―11

ひ「灯」三十一―1 (あかり?)、三十二―6・7、三十四―1、

(↓あかり)

ひきだし「抽出」四十―3

ひそみ「潜み」九十一―6、百二十八―5、「潜り」五十八―8

ひそめ「(息を) 潜め」二十四―10、百四十二―7

「(声を) 密め」二十九―8

ひらめき「(稲妻で空が) 閃き」九十七―8、「(閃光) 百二十一―9」

ひだ「襞」六十五―1、「襞飾り」六十四―11、六十七―4

ひねり「捻り」百十二―3、百二十一―8、百三十六―9、百四十

九―3、百五十一―11

びろうど「天鵞絨」四十八―題、五十―3、九十一―7

「天鵞絨幕」六十一―7

ふ

ふき「噴き」九十三―11、「噴き上げ」九十五―4、「噴き出し」

九十五―2、百二十四―10、「噴き出し口」百二十四―10、

「吹き出し」十三―4、

ふくらみ「脹らみ」九十八―4

ふさぎ「塞ぎ」三十二―1、百二十四―10

ふた「蓋」九十三―10、九十四―1

ふりまき「振撒き」百二十四―2

ふるい「篩」四十三―9

ほ

ほうき「箒」八十二―5

ほうぶつせん「拋物線」百二十四―7

ほうりなげ「抛りなげ」百一―6、「抛り投げ」百五十五―7

ほうろう「瑤瑤」七十九―1

ほおづえ「頼杖」百三十七―2

ボタン「釦」百十八―7、百二十―8、百五十一―11

ほどき「解き」四十五―8、「振り解き」七十四―9

ほとぼしり「進り」百四十九―3

ほのくらい「仄暗い」五十六―4

ほほえみ「微笑み」五十一―3、百五十二―4、百五十四―9、

百五十九―2、「微笑」百四十七―3（びしょう?）

ま

まぶしい「眩しい」三十八―1、九十七―3、百五十一―11

まもり「護り」百十七―5

まわし「廻し」八十―7、八十四―9、百五十六―2、「見廻し」

百十八―10、百三十三―10、百四十二―7、百四十九―5

まわり「廻り」九十二―10、百十一―1、「遊び廻り」八十七―

5、「動き廻り」四十四―3、「嗅ぎ廻り」九十三―2、「飛

び廻り」百三十六―7、「回り」十六―6

み

み「（面倒を）看」百二十九―6

みずみずしい「瑞々しい」七―8、百四―9

みつき「見附かり」十七―7、二十六―1

みなされ「見倣され」五十四―7

み、ずく「木菟」百六―2

め

めまい「眩暈」三十五―10、六十一―3、九十―2

も

もがき「跪き」七十五―1、百四十二―10

もや「靄」百二―6、「薄靄」百四十三―3

や

やすり「金鑪」四十三―6

ゆ

ゆるし「赦し」百三十一―6

よ

よぎり「過り」百四十一―7

よけ「避け」八十四―3

よじのぼり「攀登り」八十三―8

よどみ「澱み」百二十五―10

よろしい「宜しい」二十五―6

ら

ランプ「アルコール」洋燈「三十二」―6・7、三十四―1、百

れ

レバー「艇子」六十六―3

ろ

ろう「蠟」四十三―6

わ

わきだし「涌き出し」五十四―1

わけ「理由」四十―11、百五十二―4、百五十五―2

「わけ」七十二―10、百二十九―2